

佐倉市下勝田台畑遺跡

—— 印旛沼流域下水道埋蔵文化財調査報告書 ——

平成 9 年 3 月

千葉県印旛沼下水道事務所

財団法人 千葉県文化財センター

さ くら しも かつ た だい はたけ
佐倉市下勝田台畑遺跡

—— 印旛沼流域下水道埋蔵文化財調査報告書 ——



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第312集として、千葉県印旛沼下水道事務所の印旛沼流域下水道事業に伴って実施した佐倉市下勝田台畑遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、平安時代の竪穴住居跡が検出されるなど、この地域の古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また郷土の歴史資料として活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県印旛沼下水道事務所による印旛沼流域下水道事業東部第二幹線9602工区管渠築造工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県佐倉市下勝田字台畑319-1ほかにある下勝田台畑遺跡（遺跡コード212-038）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県印旛沼下水道事務所からの委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査部長 西山太郎、北部調査事務所長 谷 旬の指導のもと、研究員 榎原弘二が下記の期間実施した。

発掘作業 平成8年7月8日～平成8年7月31日

平成8年9月2日～平成8年9月10日

平成8年9月24日～平成8年9月30日

整理作業 平成8年9月11日～平成8年9月20日

平成8年11月1日～平成8年11月29日




平成9年1月6日～平成9年1月31日

- 5 本書の執筆は、研究員 榎原弘二が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県印旛沼下水道事務所、佐倉市教育委員会、財団法人印旛都市文化財センターのご指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」(N-54-19-14-2)「酒々井」(N-54-19-10-4)

第2図 佐倉市役所発行 1/2,500佐倉市基本図「IX-LE19-2」

- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成8年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 本書で使用したスクリーンパターン及び記号の用例は、次のとおりである。

遺構図 カマド  焼土(住居内)  砂質粘土(住居内) 

土器  金属製品  石製品 

遺物実測図 須恵器 断面黒塗り 油煙  黒色処理  朱墨 

- 11 遺物観察表中の表記については、以下のとおりである。

分量欄 ()内数字-復元推定

胎土・焼成欄 白色粒-長石・石英類 赤色粒-赤色スコリア

備考欄 + cm-床面からの高さ

床直-床面密着の出土

カマド-カマド内からの出土

墨書「□」-判読不能の文字 墨書「○」-推定文字

線刻-土器の製作後刻まれたもの 竪書-土器焼成前に刻まれたもの

本文目次

I	はじめに	1
1	調査の概要	1
2	遺跡の位置と歴史的環境	1
II	検出した遺構と遺物	5
1	竪穴住居跡	5
2	土坑等	20
3	グリッド等出土遺物	22
III	まとめ	23
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第10図	005号跡遺構実測図	15
第2図	遺跡周辺地形図	3	第11図	005号跡遺構実測図・出土遺物	16
第3図	遺構配置図	4	第12図	005号跡出土遺物	17
第4図	001号跡遺構実測図・出土遺物	6	第13図	005号跡出土遺物	18
第5図	002号跡遺構実測図・出土遺物	7	第14図	011号跡遺構実測図・出土遺物	19
第6図	003号跡遺構実測図・出土遺物	9	第15図	土坑等遺構実測図・出土遺物	21
第7図	003号跡出土遺物	10	第16図	グリッド等出土遺物	22
第8図	004号跡遺構実測図・出土遺物	12	第17図	墨書土器集成	24
第9図	004号跡出土遺物	13			

表目次

第1表	墨書土器一覧表	24	第2表	遺物観察表	25
-----	---------	----	-----	-------	----

図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真	図版8	竪穴住居跡出土遺物(2)
図版2	調査前近景・001号跡・002号跡	図版9	竪穴住居跡出土遺物(3)
図版3	002号跡～004号跡	図版10	竪穴住居跡出土遺物(4)
図版4	004号跡・005号跡	図版11	竪穴住居跡出土遺物(5)
図版5	005号跡・011号跡	図版12	1.土坑・グリッド等出土遺物
図版6	土坑等		2.墨書土器集成(赤外線)
図版7	竪穴住居跡出土遺物(1)		

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯と経過

千葉県印旛沼下水道事務所は、下水道の普及を目的として印旛沼流域下水道東部第二幹線の建設を進めている。その内9602工区の管渠築造工事に伴う埋蔵文化財の取扱いについては、関係諸機関と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、平成8年7月に市道迂回路部分495㎡(A区)、9月2日から10日まで市道拡幅部分80㎡(B区)、9月24日から30日まで市道上の管渠築造工事の発掘立て坑の部分90㎡(C区)を実施した。

(2) 調査の方法

発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、20m×20mの方眼を大グリッドを東西6区画、南北3区画設定し、西から東に向かってA・B・C…、北から南に向かって1・2・3とし、1A、2Bと呼称した。さらに大グリッド内を4m方眼の小グリッドに分割し西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…とした。したがって、各々の小グリッドは1A-10、2B-13等となる。

上層は全城の665㎡を本調査とし、重機による表土除去後、検出された遺構を調査した。下層の確認調査は2m×2mグリッドを4か所、1m×2mグリッドを4か所設定し調査した。その結果、遺物が検出されなかったため確認調査を終了した。

検出された遺構は、001号・002号…と通し番号をつけている。遺物の取上げは、遺構内のは遺構内の通し番号で、遺構外のはグリッドで取上げている。

2 遺跡の位置と歴史的環境

下勝田台畑遺跡は佐倉市東部、高崎川と高崎川に注ぎ込む南部川水系によって開折された台地上に所在する。この台地は、さらに小河川による小支谷が台地の奥深くまで入り込んで樹枝状に谷が開折され、複雑な地形を呈している。そのため本台地は、小支谷の連続により小台地の集合体といった景観になっている。

本遺跡と同様にこれらの小台地上には数多くの遺跡が存在する。近年発掘調査例が相次ぎ、その全容が解明されつつある。

旧石器時代については、墨木戸遺跡¹⁾(2)で尖頭器が出土している。

縄文時代では、台地の基部に近い酒々井町墨や飯積に大規模な中期の集落が展開している。墨木戸遺跡、墨新山遺跡(3)では、中期後半の集落跡が検出されている。

弥生時代では、本遺跡と隣接する八木宇廣遺跡²⁾(4)で後期の集落が検出されている。

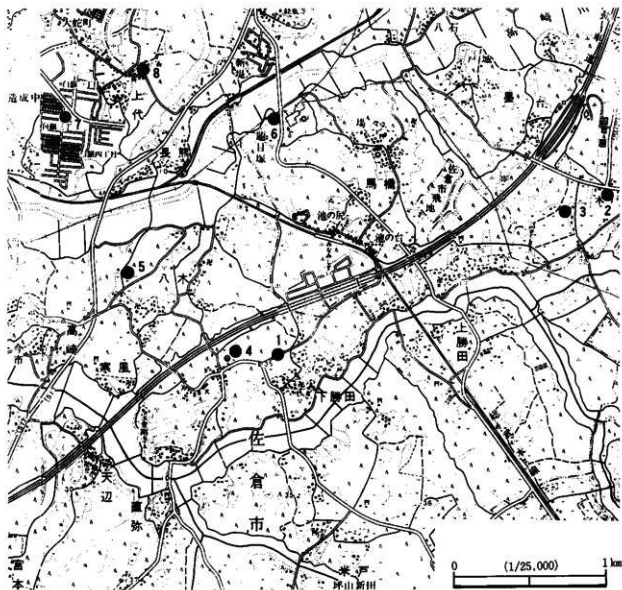
古墳時代では、八木宇廣遺跡ほか数遺跡で住居跡が検出されている。古墳は所々に点在している。本遺跡でも、001号跡のすぐ東隣の調査区外に下勝田台畑1号墳がある。本調査では、周溝等は検出されなかった。

奈良・平安時代は、台地の基部から先端部まで広く分布している。台地の先端部に近い八木山ノ田遺跡³⁾

(5)では、奈良時代の墨書人面土器が出土している。墨木戸遺跡、墨斬山遺跡、鷺尾余遺跡(6)で、8～9世紀代の集落跡が検出されている。

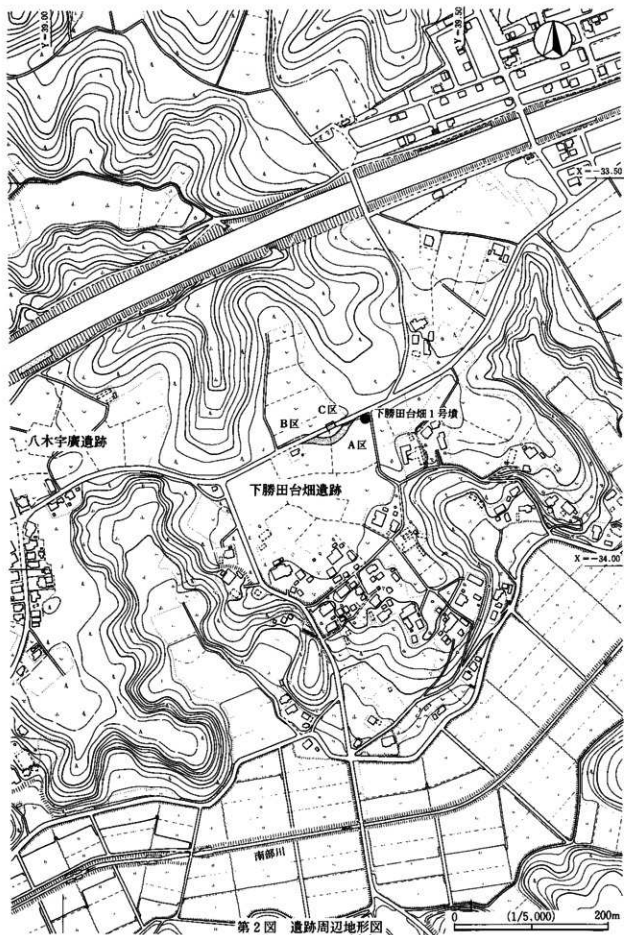
高崎川や南部川の対岸の台地上には、数多くの遺跡が所在している。本遺跡から北西へ2 kmほどの距離には、奈良・平安時代の大集落跡が検出された高岡遺跡群⁹⁾(7)や古代寺院跡の長熊麁寺跡¹⁰⁾(8)がある。

- 注1 中山俊之 1995 「墨木戸」 財団法人印旛都市文化財センター
 2 小谷竜司 1996 「八木字廣遺跡」 財団法人印旛都市文化財センター
 3 渋谷健司 1997 「八木山ノ田遺跡」『平成8年度千葉県遺跡調査研究発表会 発表要旨』
 4 宮内勝己ほか 1993 「高岡遺跡群」Ⅰ～Ⅳ 財団法人印旛都市文化財センター
 5 永沼律朗 1987 「佐倉市長熊麁寺跡確認調査報告書」千葉県教育委員会

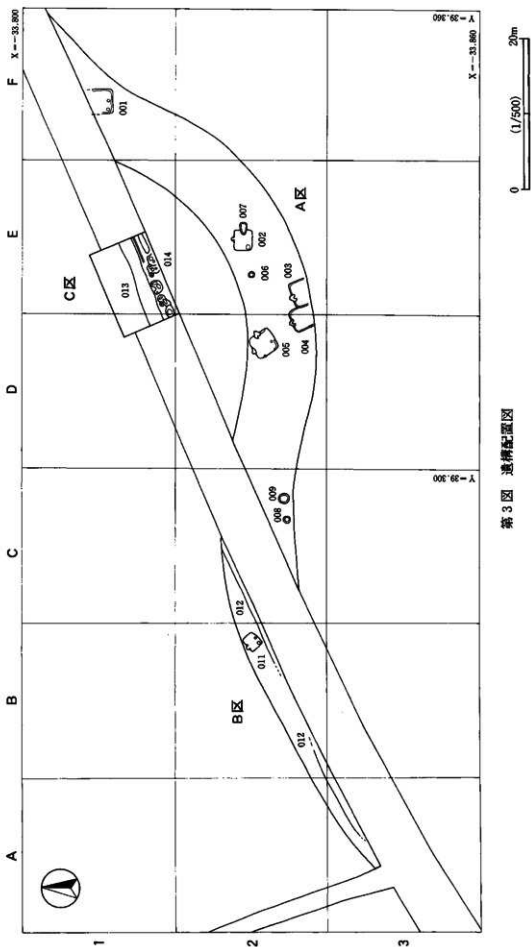


1. 下勝田台畑遺跡 2. 墨木戸遺跡 3. 墨斬山遺跡 4. 八木字廣遺跡
 5. 八木山ノ田遺跡 6. 鷺尾余遺跡 7. 高岡遺跡群 8. 長熊麁寺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 通稱配置図

II 検出した遺構と遺物

検出した遺構は、竪穴住居跡6軒（平安時代）、土坑4基、道路跡2条、ピット群1基である。

なお、調査時につけた遺構番号を本書ではそのまま使用した（010号跡は欠番）。

1 竪穴住居跡

001号跡（第4図 図版2・7）

[遺物観察表P25]

（遺構）A区 1 F21・22グリッドに位置し、調査区の北東端に当たる。

平面形は、南壁3.4m、東壁現存2.6m、西壁現存1.5m、北壁が消失しているが、約3.4mの方形と考えられる。検出面からの深さは、南壁で0.1m～0.15mである。検出面が傾斜しているので、北側にいくほど浅くなる。覆土はローム粒を少量含む黒褐色土である。北壁にカマドがあったものと推定される。主軸方位はほぼ座標北である。周溝は現存部分では全周し、周溝幅0.15m～0.2m、深さ0.06m～0.1mである。床面はハードローム層中に作られ、ほぼ平坦で、堅緻な部分が中央付近に認められた。柱穴は検出されなかった。南西コーナーのP₁は、0.4m×0.5mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。覆土は暗褐色土である。南壁中央付近のP₂は、径0.25m、深さ0.2mで、入口施設（梯子ピット）と考えられる。南壁際から砂粒を含む焼土塊が床面より厚さ0.05mの範囲で検出された。これはカマドの構築材の一部が廃棄されたものと考えられる。

（遺物）出土遺物は、遺存状態がよい南壁側に集中している。1の土師器環は床面とやや浮いた状態の破片が接合している。2の土師器環はP₁の上面（床面レベルよりやや下）から正位の状態出土したもので、P₁が埋土後に置かれたものと考えられる。9の須恵器長頸壺は周溝際の床面から伏せた状態で出土した。他は床面直上やや浮いた状態で出土している。

1・2は土師器環、3は貼付高台環である。1は大形で内面には丁寧なヘラミガキが施され、逆台形の整った形をしている。2は部厚な作りで口縁部が大きく開く。内面の一部に油煙が付着する。

4は須恵器の環で、焼き振れのため歪んだ形である。器肉の中部は灰褐色を呈すが、全体に極めて均質に焼成されたものである。

5～8は小形の甕で、胴部上半部に膨らみがある。口縁部が「く」字に屈曲し、口唇下に沈線を巡らす。外面の仕上げ調整は当該期に一般的な上半を縦に、中から下部を横位にヘラケズリをしている。5・6は同一個体と思われる。

9は東海系の長頸壺であろう。底部は平坦で部厚い「ハ」字形の高台が付く。底部以外の外面には自然釉のほか、淡灰褐色の発色がみられる。

これらの土器群は、9を除き9世紀中葉の所産と考えられる。

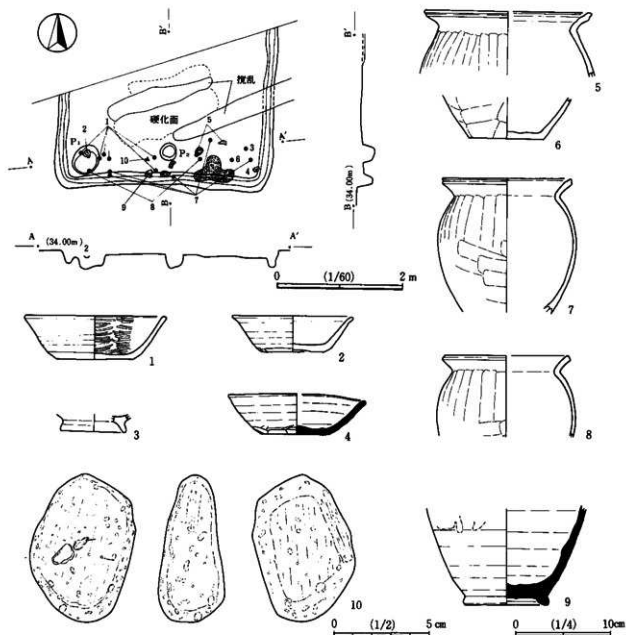
10は軽石で、外面を磨ってやや扁平に成形されている。

002号跡（第5図 図版2・3・7）

[遺物観察表P25]

（遺構）A区 1 E22グリッドに位置し、007号跡（土坑）と重複する。

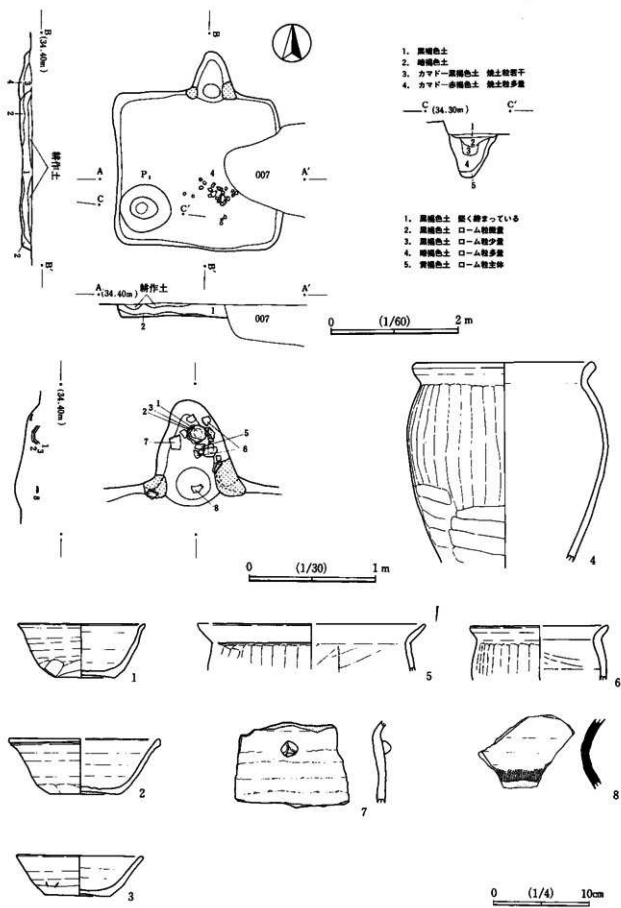
平面形は、2.6m×2.4mのやや横長の方形で、検出面からの深さは、0.1m～0.15mである。007号跡に切



第4図 001号跡遺構実測図・出土遺物

られている。カマドは、北壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方位は、ほぼ座標北である。周溝・支柱穴は検出されなかった。床面はほぼ平坦で、特に堅緻な部分は認められなかった。南西コーナーのP₁は、径0.8mの円形を呈し、深さ0.65mを測る。ピット上面は堅くしまっており、住居使用時に埋土してその後床面となったものと考えられる。このピットからは遺物は出土しなかった。カマドは、袖の残りが悪く、住居廃棄時に壊されたと考えられる。壁への掘込みは0.6mで、丸みのある三角形状である。火床部はあまり被熱の痕跡がなく、焼土化していない。

(遺物) 出土遺物は、カマドと住居中央からやや南寄りに集中している。カマドの煙道部から1~3の土師器環が正位の状態で3枚重なって(下から2・3・1の順)、また5・6の土師器壺と7の土師器甕が出



第5図 002号跡遺構実測図・出土遺物

土した。カマド覆土中からは8の須恵器甕の破片が出土した。4の土師器甕は床面から潰れた状態で出土した。

1～7は比較的器面の粗い土師器である。1は半球形の深い環で、口縁部の上端のみ極端に閉き、体部全体に回転の遅いロクロ目がめぐる。口唇内端に強い横ナデによる沈線がみられる。2は大形の環で、口縁部が極端に外反するが、全体として丸味のある器形で、口径が底径の2.2倍となる。3の環は部厚い作りで逆台形を呈する。4～6は甕である。4は胴部上半部で最大径21.0cmを測り、全体に部厚い作りである。口縁部の内外は強いナデつけのため凹凸が激しい。7は甕破片で、小さな把手が残る。破片から推定するとかなり大形のものである。胴部に幅15mm～18mmの粘土紐の輪積み痕が明瞭に残る。

8は須恵器甕の頸部破片である。

上記の土器群は9世紀後葉から末期の様相を示すと思われる。

003号跡（第6・7図 図版3・7・8）

[遺物観察表P26]

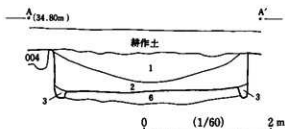
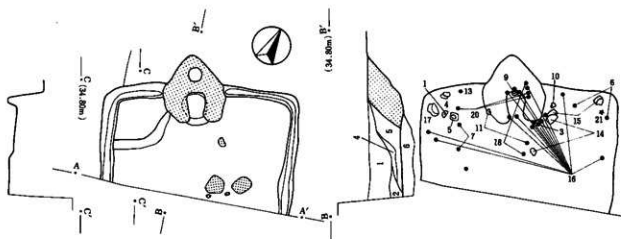
（遺構）A区 2E30・40グリッドに位置し、西壁の一部が004号跡と重複する。南側が約1/3調査区外のため未調査である。

平面形は約3.1mの方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは0.5mである。覆土は、ローム粒・ロームブロック（径1cm～5cm）を多く含み、人為的に埋め戻された可能性が窺える。カマドは、北壁中央からやや西寄りに位置する。カマドを中心とした主軸方位は、N-28°-Wである。壁はほぼ垂直で、周溝はカマド部分を除き全周するものと考えられる。周溝の深さは0.1m～0.15mである。主柱穴・ピットは検出されなかった。床面は貼床であるが、全体的に硬化している。床下は凹凸があり、床面から深さ0.15m～0.2mを測る。北西コーナーからカマドの左側にかけて、床面より0.05m～0.1m高いテラス状の段が認められた。

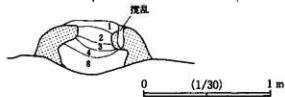
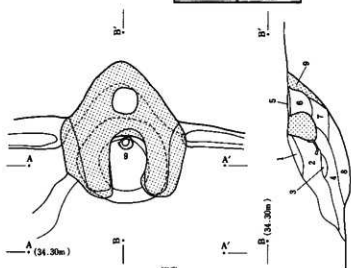
カマドは、煙道部の遺存状態が良好である。天井部の構築材と思われる砂質粘土が住居中央付近まで流れ込んでおり、一部床面上にブロック状に堆積している。煙道部は壁を約0.4m掘り込んでおり、煙道は緩やかに立ち上がる。煙道部端には砂質粘土が残る。火床部は径0.5mで、0.15mの厚さで焼土層が形成される。

（遺物）出土遺物は、カマド内とカマド袖周辺とテラス状の段に集中している。カマド覆土中から9の土師器環が出土した。16の須恵器甕と20の瓦はカマド内と住居床面直上から出土した破片が接合した。テラス状の段からは、1・4の土師器環、17の須恵器甕が床面直上から出土した。カマド袖周辺のものは床面からやや浮いた状態で出土している。

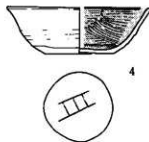
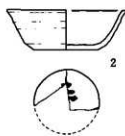
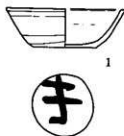
1～10は土師器環である。1・2・6・7は体部下位に強いヘラケズリが施され、口縁部のみ外反する全体的に丸味のある形である。1の切り離しはヘラ切りの可能性があるが、他は回転糸切り後回転ヘラケズリで丁寧な仕上げをしている。4・5は大形で、内面にはヘラミガキが施され、炭素吸着による黒色処理が成される。4は半球形を呈し碗形に近く、5は逆台形となる。外面の仕上げ調整も4は回転ヘラケズリ、5は手持ちヘラケズリと違いがみられる。9は非ロクロの小形環で、内面に粗い縦位のヘラミガキが施される。内面の1か所に油煙が付着している。口唇の一部には、故意に打ち欠いたと思われる割れ口があり、灯明具として使用されたものである。10は貼付高台環で、薄手の「ハ」字に開く器形である。高速回転のロクロ調整で、体部下位は斜位のヘラケズリで仕上げている。1～3・8には墨書、4には練刺が



1. 黒褐色土 ローム粒若干
2. 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒多量
3. 黄褐色土 ローム粒多量
4. 灰褐色土 暗褐色土+砂質粘土多量+焼土粒若干
5. 灰白色土 砂質粘土+焼土粒若干
6. 黄褐色土 粘土層 ロームブロック多量+ローム粒少量

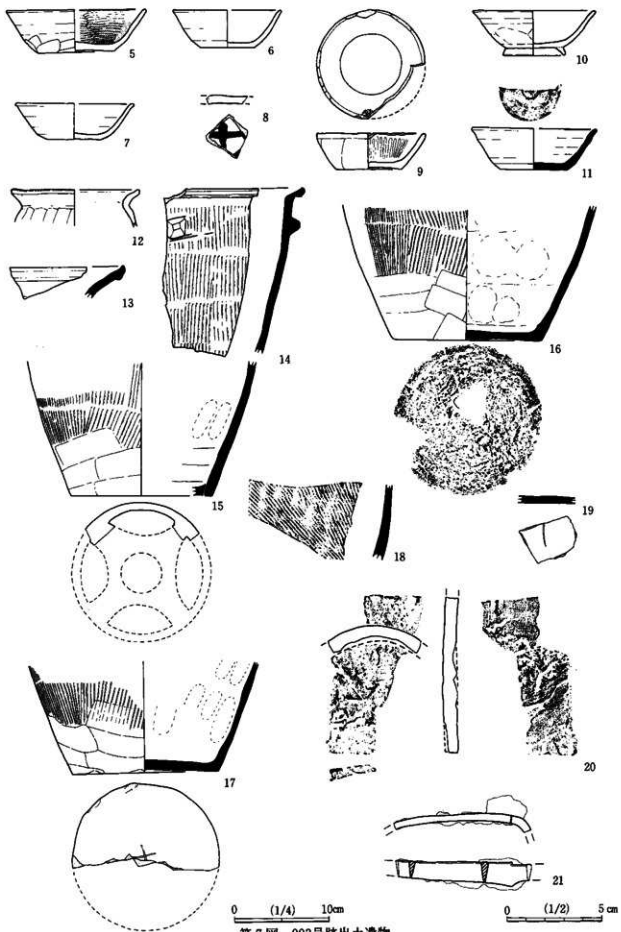


1. 黒褐色土 砂質粘土少量
2. 灰褐色土 砂質粘土多量、焼土粒若干
3. 赤色土 赤化した砂質粘土ブロック
4. 暗赤褐色土 焼土粒・焼砂多量、炭化粒若干
5. 黒色土
6. 灰褐色土 赤化した砂質粘土+暗褐色土
7. 暗灰褐色土 赤化した砂質粘土+黒色土
8. 赤色土 焼土+赤化した砂質粘土粒
9. 赤灰色土 赤化した砂質粘土



第6図 003号跡遺構実測図・出土遺物

0 (1/4) 10cm



第7圖 003号跡出土遺物

見られる。

11は須恵器環で、全体的に暗褐色の色調をしている。体部はほぼ直線的に開き、口唇のみ外反する。切り離しは回転ヘラ切りと思われ、内面中央に指頭で押しつけた浅い窪みがある。

12は小形の土師器甕である。

13～19は須恵器甕・甗である。14・15は同一個体であるが、接合はしなかった。広口口縁で、貼付把手がある。口縁部はほぼ水平に折り曲げられ、帯状になる。外面には幅45mm～50mmの単位の縦位のタタキ目が、下半には粗いヘラケズリが施される。底部は五孔式の甗となる。16・17は甕で、胴部の調整方法は15と同じである。18は胎土が緻密で、焼成も他のものと異なり堅く締まっている。内面には当て具痕の同心円文が見られる。17・19は底部外面に寛書きがある。15・16・19の底部に縄目の敷物痕が見られる。

9・10のように時期の異なる様相も認められるが、概して9世紀中葉の所産と考えられる。須恵器は甕・甗の特徴から18を除き地方窯として捉えることができよう。

20は丸瓦片である。凸面はヘラ整形が施され、凹面の布目は極めて細かく右端に布を綴じ合わせた継ぎ目が残る。21は刀子で、著しく研ぎ減りしている。棟部分で刃幅13mm、棟幅4mmの平造りである。

004号跡(第8・9図 図版4・9)

[遺物観察表P27]

(遺構) A区 2D34・44グリッド、2E30・40グリッドに位置し、東壁の一部が003号跡と重複する。南側が約1/2調査区外のため未調査である。

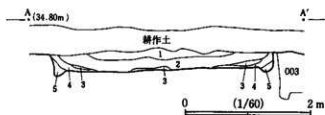
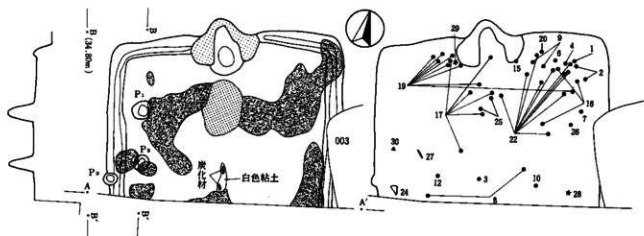
平面形は約3.7mの方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは0.3mである。カマドは、北壁中央に位置する。カマドを中心とした主軸方位は、N-15°-Wである。壁はほぼ垂直で、周溝はカマド部分を除き全周するものと考えられる。周溝の深さは0.05m～0.1mである。ピットが西壁際から1本と西壁寄りに2本検出された。床面からの深さは、P₁が0.4m、P₂が0.45m、P₃が0.2mである。床面は特に堅緻な部分は認められなかったが、全体的に硬化している。床面からは、カマドの構築材と思われる砂質粘土・白色粘土がブロック状に堆積している。また、焼土粒と若干の炭化材と赤化した砂質粘土が、住居中央付近では床面から、壁付近ではやや浮いた状態で堆積している。

カマドは、煙道部の遺存状態が良好である。煙道部は壁を約0.3m掘り込んでおり、煙道は緩やかに立ち上がる。煙道部端には砂質粘土が残る。火床部は径0.5mで、0.15mの厚さで焼土層が形成される。

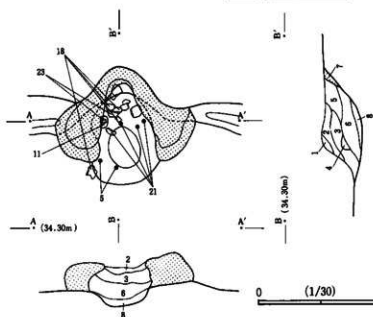
(遺物) 出土遺物は、カマド内とカマド両脇の住居覆土中に集中している。カマド内からは5・11の土師器環、18・21の土師器甕が出土し、23の須恵器甕が煙道部から燃焼部覆土中にかけて出土した。住居覆土中から出土した遺物は、そのほとんど床面からやや浮いた状態で出土したものである。しかも完形のは少なく、遺存度が1/2以下のものである。27の刀子・30の砥石は床面直上から出土している。

1～15は土師器環・皿類である。8～10・13は器面が粗く、くすんだ色調のもので、他は器面が細かく明黄褐色の一群である。1～3はいずれも内面にヘラミガキが施される。半球形に近い器形で、口径が底径の2倍以上になる。4～6は逆台形を呈し、口縁部でわずかに開く器形の環で、口径13.5cm以上と他に比べてやや大形である。7～10は体部に丸味があり、口縁部が大きく外反する器形の環である。15は無台皿で、内面に粗いミガキがある。これらの仕上げ調整は、3・8～10・13が手持ちヘラケズリ、他は丁寧な回転ヘラケズリである。13・14には墨書が見られる。

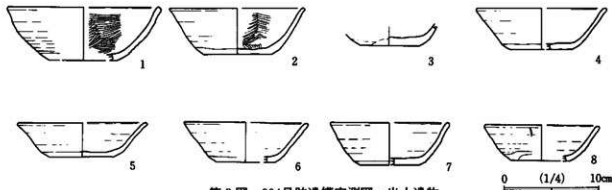
16は褐色の須恵器環と思われるが、器形・胎土などは9・10に近似する。



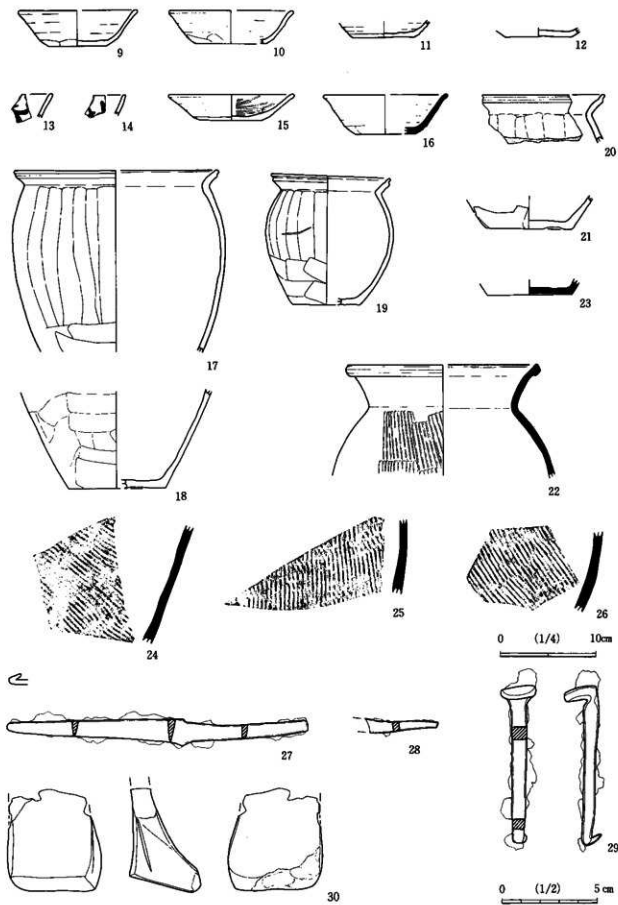
1. 黒褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 赤色土
 4. 褐色土
 5. 暗黄褐色土
- 焼土粒+赤化した砂質粘土粒
ローン粒多量



1. 灰白色土
 2. 暗褐色土
 3. 灰白色土
 4. 赤色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗赤灰色土
 7. 暗赤褐色土
 8. 暗褐色土
- 砂質粘土主部+褐色土器片
砂、焼土器片
砂質粘土主部+褐色器片
赤化した砂質粘土ブロック
暗褐色土+焼土粒+赤化した砂質粘土
赤化した砂質粘土
焼土器片、赤化した砂質粘土粒少量



第8図 004号跡遺構実測図・出土遺物



第9图 004号跡出土遺物

17~21は土師器甕で、19のみ丸胴の小形甕である。甕の製作技法は同じで、口縁部を「く」字に折り曲げ、帯状に直立した中央に沈線を施し、口唇を上方に張り上げる。胴部の調整は縦位ヘラケズリの後、下半のみ横位ヘラケズリへと移る。底部もヘラ調整するが、部分的に縄目の痕跡がみられる。

22~26は須恵器甕である。22は長頸形で、胴上半で最大径23.5cmほどの中形甕である。口縁は幅12mmの帯状を成し、特に口唇上端は鋭く引き上げている。叩き締めは他のもの比べて弱い。24~26は大形品の破片で、幅4cmほどの縦位タタキ目がはっきりとしている。

これらの一群の土器は9世紀中葉の所産と思われる。須恵器は地方産と捉えることができよう。

27~29は鉄製品である。27は刀子で、刃長96mm、刃幅は棟部分で15mm、棟幅4mmを測る。28は刀子の茎と思われる。29はいわゆる犬釘といわれるものである。

30は凝灰岩製の砥石で、一端を欠いている。片面の研ぎ減りが著しく、側面には金切り痕が見られる。

005号跡 (第10~13図 図版4・5・10・11)

[遺物観察表P28]

(遺構) A区 2D34グリッド、004号跡の北西側に位置する。

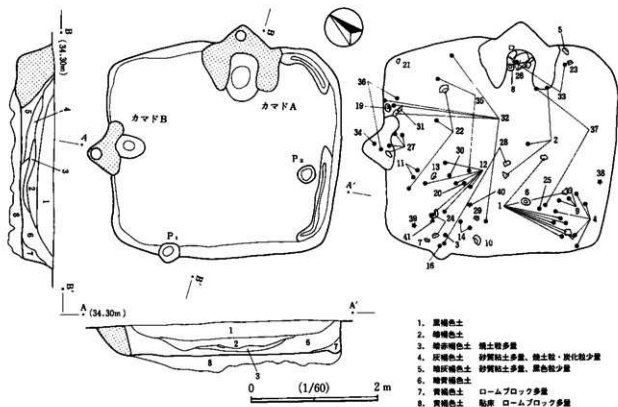
平面形は約3.2m×3.5m×3.1mのややゆがんだ方形を呈する。検出面からの深さは0.5mである。カマドは、北東壁中央からやや東寄りに位置する。カマドを中心とした主軸方位は、N-51°-Eである。また、北西壁中央に旧カマドの痕跡があり、カマドの造り替えが行われたと考えられる(以下新カマドをカマドA、旧カマドをカマドBとする)。カマドBを主軸とした方位は、N-40°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝は北東壁と南東壁の一部に巡る。床面は貼床されており、住居中央部分にやや堅緻な部分が認められたほかは軟弱である。壁際まで貼床が及んでいる箇所もあり、周溝の検出が困難であった。周溝が本来はさらに巡っていた可能性もある。ピットは南西壁際からP₁と南東壁寄りにP₂が検出された。P₂はカマドBの対面にあり入口施設の梯子ピットと考えられる。床面からの深さは、P₁が0.17m、P₂が0.18mである。

カマドAは、煙道部の遺存状態が良好である。煙道部は壁を約0.3m掘り込んでおり、煙道は緩やかに立ち上がる。煙道部端には砂質粘土が残る。天井部の構築材と思われる砂質粘土が焼土粒・炭化粒とともに住居中央部まで流れ込んでいる。火床部は0.7m×0.5mの楕円形で、0.1mの厚さで焼土層が形成される。

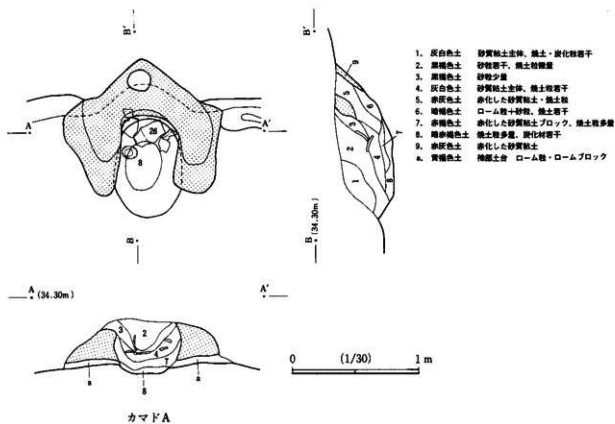
カマドBは、袖の基部付近からきれいに切られおり、両袖が若干と煙道部が遺存する。煙道部端には砂質粘土が残る。火床部は径0.5×0.3mの楕円形で、焼土は廃棄の際掻き出されたものと考えられる。

(遺物) 多量の遺物が出土しており、図示したのもでも41点ある。遺物は、カマド内と覆土中から多く出土し、床面直上ものは少ない。特に壁際からのものは覆土上層からの出土であり、竪穴住居が埋没過程で廃棄されたことが窺える。壁際の覆土上層から銚帯具1点が出土している。カマドA内からは、8の土師器環と26の甕が火床面から0.2mほど浮いた状態で出土し、カマドを廃棄する際に投げこまれたものと考えられる。

1~20は土師器鉢・環・皿類である。1・2は鉢で、体部下位を強くそぎ落とされた逆台形を呈する。3~18土師器環である。3・15は内面は丁寧にヘラミガキがされ、炭素吸着による黒色処理が施される。小形で箱形に近い6・10のほかは、体部全体に丸味があり口縁部がわずかに外反する器形である。その中でもやや大形で深い4・5、大形で浅い7・12、その中間の器形の13、中形で中程度の深さの8・9・11など器形にバラエティがある。これらの環は色調は異なるものの16~18も含め、胎土の緻密さ、歪みなく

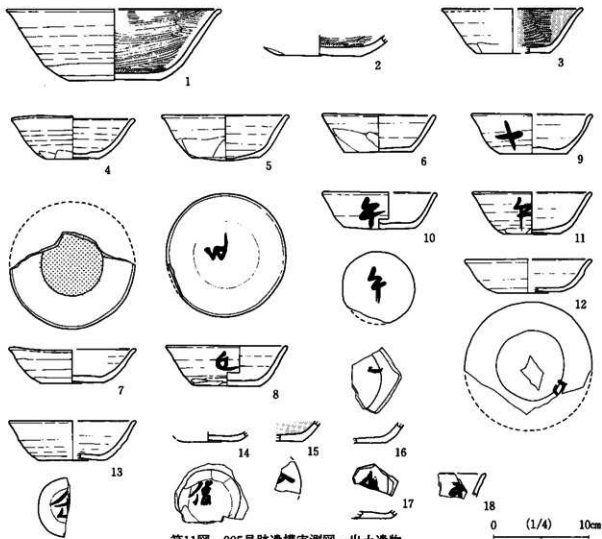
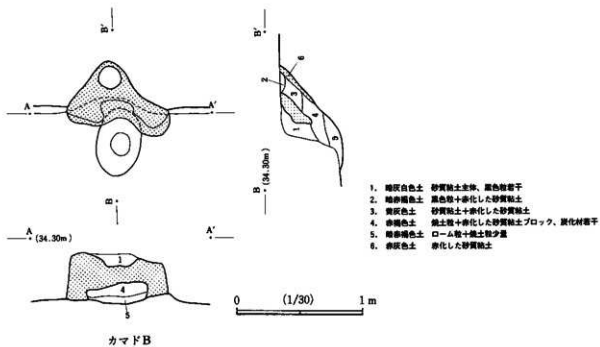


1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗赤褐色土 焼土粒多量
4. 灰褐色土 砂質粘土多量、焼土粒・炭化粒少量
5. 暗灰褐色土 砂質粘土多量、黒色粒少量
6. 暗黄褐色土
7. 黄褐色土 ロームブロック多量
8. 黄褐色土 粘厚 ロームブロック多量

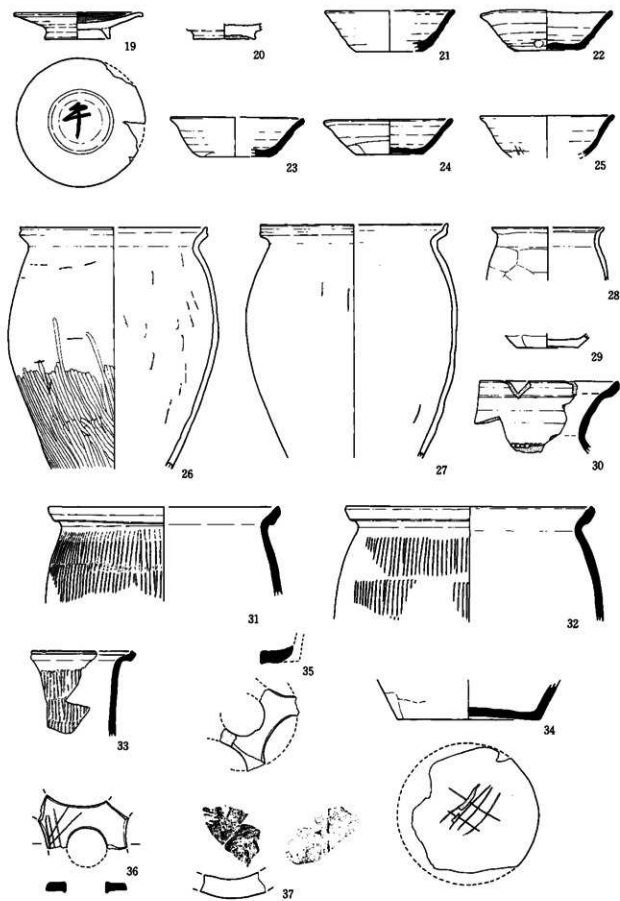


1. 灰白色土 砂質粘土主幹、焼土・炭化粒若干
2. 黒褐色土 砂粒若干、焼土粒少量
3. 黄褐色土 砂粒少量
4. 灰白色土 砂質粘土主幹、焼土粒若干
5. 赤灰土 赤化した砂質粘土・焼土粒
6. 暗褐色土 ローム塊+砂粒、焼土若干
7. 赤褐色土 赤化した砂質粘土ブロック、焼土粒多量
8. 暗赤褐色土 焼土粒多量、炭化粒若干
9. 赤灰土 赤化した砂質粘土
10. 黄褐色土 粘厚土 赤・ローム・ロームブロック

第10図 005号跡遺構実測図

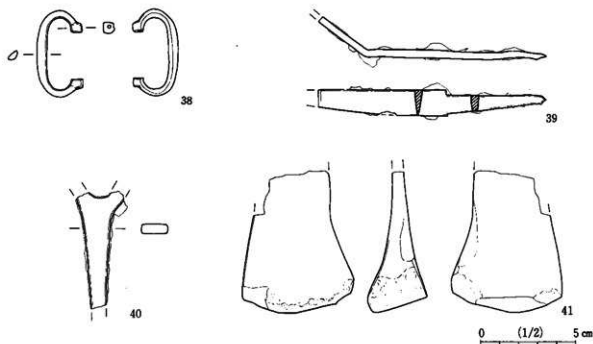


第11図 005号跡遺構実測図・出土遺物



第12图 005号跡出土遺物

0 (1/4) 10cm



第13図 005号跡出土遺物

丁寧な仕上げ調整がされる点で共通している。29も環の底部であろう。19は貼付高台の皿で、口縁部が反り返るほど平らに開く。20は作出した高台皿である。いずれも内面は丁寧にヘラミガキされている。7には底部内面に朱墨溜め、8～19には墨書が見られる。

21～25は須恵器環である。21・25は体部下半に丸味が強い器形となり、回転ヘラケズリ調整かと思われる。22・24は底部が部厚く成形され、その端を強く削り込んで体部下位としているようで、この部分が突出して見える。体部は直線的で、口縁部が大きく開く。23は浅めの環で、ほぼ逆台形を呈する。

26・27は土師器の長胴甕で、胴部上半で最大径となる「常総型」である。口縁部は「く」字状に折り曲げ、帯状に直立する。28は薄手の小形甕で、頸部は直立し口縁部が開く。胴部の調整は強い横ヘラケズリである。

30～36は須恵器甕・甔である。30は長頸の甕の口縁部である。31・32は広口の甕で、胴部上方で最大径となる。いずれも幅広の口縁帯の口唇内側部分に沈線がめぐる。33は甔の口縁部、35・36は甔の五孔式の底部である。34の甕の底部には、003号跡出土の須恵器甕と同様に縄目の敷物痕が認められる。34・36の底部には記号と思われる篋書きが見られる。

37は胎土に雲母を多く含む瓦片である。

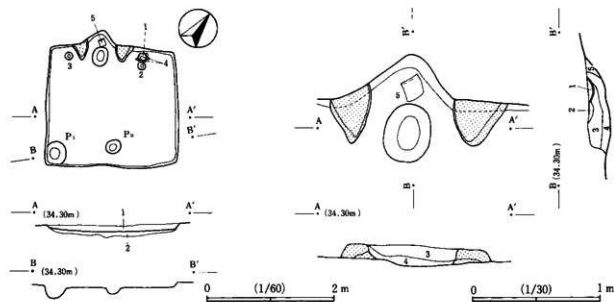
38～40は金属製品である。38は青銅製の袴帯具の銚具の弓状の部分である。39は刀子で刃部中央で「く」字状に折り曲げられている。40は雁股式の鉄鎌である。

41は凝灰岩製の砥石で、一端を欠いている。片面の研ぎ減りが著しい。

これら一群の土器は破片など一部を除いて9世紀の第2四半期の所産と考えられ、墨書土器の筆致の巧みさ、7に見られる朱墨溜めの痕が目される。

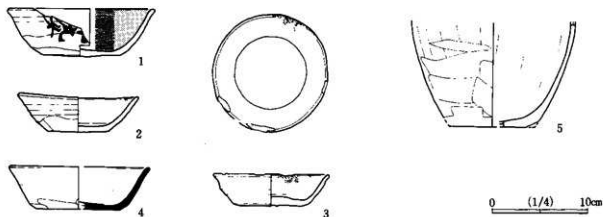
(遺構) B区 2 B24グリッドに位置する。

平面形は、2.0m×1.9mの方形を呈し、かなり小形の住居跡である。検出面からの深さは、0.05m～0.1mである。カマドは、北西壁中央からやや西寄りに位置する。カマドを中心とした主軸方位は、N-40°-Wである。周溝・主柱穴は検出されなかった。床面は貼床で、特に堅緻な部分は認められなかった。南コーナーのP₁は、径0.35mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。P₂は南東壁中央寄りに位置し、径0.2m、深さ0.1mで、入口施設の梯子ピットと考えられる。カマドは、両袖の基部が遺存している。壁への掘込みは0.4mで、丸みのある三角形形状である。火床部はあまり被熱の痕跡がなく、焼土化していない。



1. 黒褐色土
2. 暗褐色土 肥床 ローム粒・ロームブロック若干

1. 黒褐色土
2. 赤色土 焼土粒+赤化した砂質焼土
3. 暗赤褐色土 焼土粒+褐色土若干
4. 暗褐色土 ローム粒多量+焼土粒若干
5. 暗赤褐色土 焼土粒・砂質焼土若干



第14図 011号跡遺構実測図・出土遺物

(遺物) 遺物は、カマド内とカマドの両脇から出土している。カマドの煙道部から5の土師器甕の底部が出土した。カマドの右脇の床面からは1の土師器環と4の須恵器環が正位で重なって、2の土師器環が伏せた状態で出土した。カマド左脇の床面からは3の土師器環が正位の状態出土した。

1～3は土師器環である。1は内面を細かくミガキ上げ、炭素吸着による黒色処理が施される。半球形に近い器形である。ヘラ切り難し後底部～体部下位を回転ヘラケズリし、さらに体部中半まで手持ちでヘラ調整している。胎土に金雲母を多く含む特徴がある。体部に墨書で「□部・丸女」と記されている。2は、やや浅めの器形で、ロクロ目がはっきり残る。仕上げは手持ちで肉厚の部分をそぎ落とすように粗くヘラケズリしている。口縁内面に灯芯の痕跡がある。3は浅い環で、底部が部厚な作りである。口縁部の1か所を製作時に外側に押し広げているほか、焼成後に3か所ほど打ち欠いている。灯明具として使用されたものである。口唇部の内外面に油煙が付着している。

4は赤色の須恵器環で、逆台形を呈する。

5は土師器甕の底部である。二次焼成を受け器面が脆くなっている。

いずれもバラエティに富む一群の土器であるが、甕などに9世紀後葉の様相が見られる。

2 土坑等

006号跡 (第15図 図版6・12)

[遺物観察表P30]

A区 2E21グリッド、002号跡の西側に位置する。平面形は、1.0m×0.9mの楕円形を呈する。深さは0.3mを測る。遺物は鉄製品が2点覆土上層の同一レベルから出土している。時期は平安時代以降と思われる。

007号跡 (第15図 図版6・12)

[遺物観察表P30]

A区 2E22グリッドに位置する。002号跡(住居跡)と重複しているが、土層断面から007号跡が新しい。平面形は、2.2m×1.5mやや不整な楕円形を呈する。深さは0.5m～0.6mを測る。

遺物は、土師器の破片が覆土中から少量出土している。1～3は土師器の環の口縁部破片である。口縁部の開きがそれぞれ異なるが、いずれも体部下半が手持ちヘラケズリである。

時期は平安時代(10世紀代)と思われる。

008号跡 (第15図 図版6・12)

[遺物観察表P30]

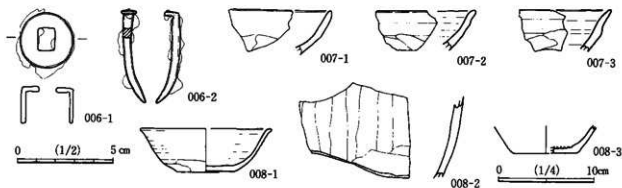
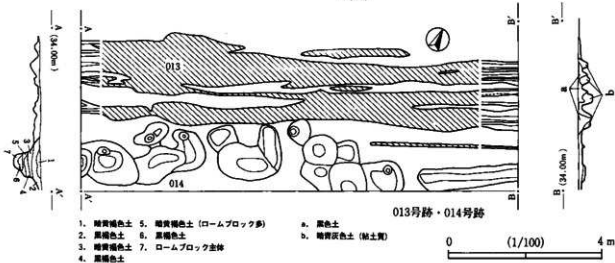
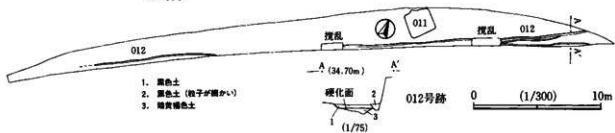
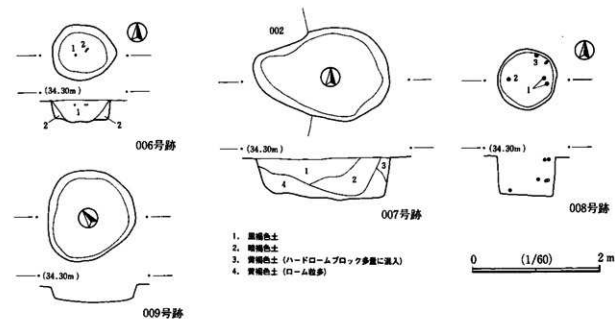
A区 2C33グリッド、009号跡の西側に位置する。平面形は、径0.95mの円形を呈する。深さは0.6mを測る。覆土は黒褐色土で、底面近くはローム粒の混入が若干増してくる。

遺物は、土師器の破片が少量と炭化材(長さ3cm)が出土している。1は土師器の環で、口縁部が外反し、体部下位は手持ちヘラケズリが施される。2は土師器甕の胴部破片である。3は土師器甕の底部であるが、二次焼成のため器面が脆く所々剥落している。

時期は平安時代と思われる。

009号跡 (第15図 図版6)

A区 2C33・34グリッド、008号跡の東側に位置する。平面形は、径1.4mの不整な円形を呈する。深さ



第15図 土坑等遺構実測図・出土遺物

は0.25mを測り、皿状である。覆土は黒褐色土である。遺物は、土師器の細片が若干出土しているが、図示し得るものはない。

時期は平安時代以降と思われる。

012号跡 (第15図 図版6)

B区に位置し、現道路に平行する。南側は道路下にかかり未掘である。浅い溝状で、底面には硬化面が認められたことから、道路として機能したことが推察される。遺物は覆土中から縄文土器、土師器等の細片が出土した。図示し得るものはない。

013号跡 (第15図 図版6)

C区に位置し、現道路下から検出した。確認面がハードローム面である。調査は、東西端の土層観察を行い、中央部分は検出面での平面プランを確認した(トーン部分)。幅の狭い浅い溝が多数あり、埋め戻された痕跡も認められることから、帷の補修の跡と考えられる。現道路が舗装される以前の道路である。遺物は土師器から近世の陶磁器細片まで少量出土しているが、図示し得るものはない。時期は近世以降と思われる。

014号跡 (第15図 図版6)

C区に位置し、現道路下から検出したピット群である。確認面がハードローム面なので上端の形態は不明であるが、円形や楕円形のピットが集中する地区である。ピット内にさらに径20cmほどの柱穴と見られる小ピットも認められるが、建物の柱穴群としては明確に並ばない。遺物は土師器や近世の陶磁器細片が若干出土しているが、図示し得るものはない。

3 グリッド等出土遺物 (第16図 図版12)

本遺跡の調査区内では、縄文時代の遺構は検出されなかったが、土器片が20点あまりと、石鏝が1点出土した。

1～3は縄文土器である。1は口唇部に短い条線文が施される。2は隆帯下に結節沈線が施される。3は縄文が施され、胎土に雲母を含む。1は前期後半、2・3は中期前半の時期である。1・2は2Bグリッド、3は2Eグリッドから出土した。

4は須恵器製の口縁部破片で、櫛書き波状文がめぐる。色調は内外面とも灰色で、胎土に白色粒が含まれる。表採である。

5は黒曜石製の石鏝である。2Eグリッドから出土した。



第16図 グリッド等出土遺物

Ⅲ ま と め

1 遺構について

下勝田台畑遺跡からは、平安時代の竪穴住居跡6軒、土坑4基のほか、近世まで利用されていたと思われる道路跡、ピット群が検出された。

竪穴住居跡は、すべて北壁にカマドを持って構築されており、005号跡のみに東壁に改築されている。平面形は方形で、規模は002号跡・011号跡が一辺2m前後、他は3m前後である。いずれも明確な柱穴が認められない。梯子ピットは001号跡・011号跡及び005号跡の旧カマド対面に認められる。003号跡・004号跡については未掘部分があるため不明である。

重複関係にある003号跡・004号跡は壁の一部が接する程度で、土層観察や土器の様相からは新旧の確認はできなかった。ただし、004号跡では、カマド全面を破壊した後、焼却遺棄した痕跡が明らかであるため、本跡の方が古いものと考えた。

各々の住居跡の時期については、本文にも記述してあるが、改めてまとめておく。

9世紀中葉としたものは、001号跡・003号跡・004号跡・005号跡である。このうち005号跡は出土した土器の様相から第2四半期に比定されると考えられる。

9世紀後葉としたものは、002号跡・011号跡で、いずれも2m前後の小形住居跡である。

また、007号跡（土坑）の遺物は、10世紀代のものである。

今回の調査区は、東西350m、南北450mに及ぶ台地のほぼ中央に位置する。わずか665㎡の範囲に集中して遺構と遺物が発見されたことは、台地全体にかなり大規模な集落が9～10世紀代に存在したものと考えられる。

2 遺物について

多量の土師器・須恵器のほか、刀子・鉸具などの金属製品も出土した。特にカマド内や003号跡に見られるテラス状の段から出土している点特徴的である。

墨書土器（第17図 図版12）は21点で、すべて土師器坏・皿である。このうち判読できるものは以下のとおりである。複数文字は、011号跡の「□部・丸女」で、氏名（うじな）を示していると思われる。一字には、003号跡の「山」・「益」、005号跡の「午」4点・「十」・「僧」がある。「山」「十」は県内の多くの遺跡で類例が見られるが、本遺跡で出土したこの2点は筆致が稚拙で記号と見間違えほどである。そのほかの文字は氏名銘を筆頭に非常に秀逸で、かなりの識字者の手によるものである。「僧」は県内では袖ヶ浦市西寺原遺跡に類例が見られるのみで、僧の存在を示唆した仏教関係の墨書土器として貴重な資料といえる。「午」は佐倉市高岡大山遺跡、「益」は八千代市白幡前遺跡等に類例が見られる。また、005号跡の13は「正」の可能性がある。「岳」は東金市山田水呑遺跡・同滝木浦遺跡等に類例が見られる。005号跡「と」については、漢字一字の異体字と思われるが県内には類例が見当たらない¹⁾。

窠書土器は5点で、須恵器の壺・甔の底部外面に描かれている。また、003号跡の4の土師器坏の底部外面には線刻が認められる。これらはいずれも記号と考えられる。

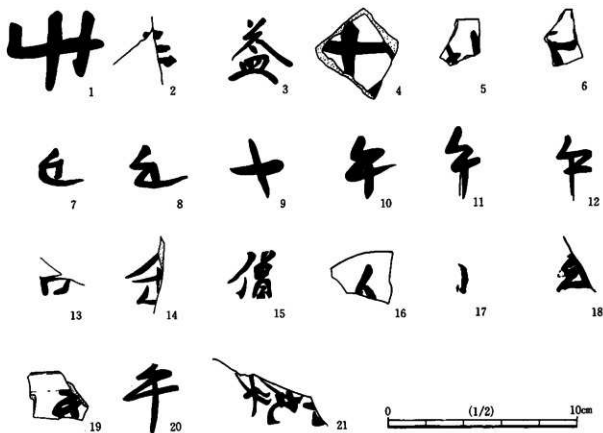
須恵器のうち001号跡の9・003号跡の18以外は、地方（じかた）窯産である。特に環の特徴のうち、底部に丸味がある器形、底部の切り離し方やその後の調整方法、甕類の底部に見られる縄目の敷物痕の特徴などからいわゆる「千葉市域産」の宇津志野窯（9世紀第2四半期から第3四半期の操業）産の可能性が高い²⁾。

注1 黒書土器の類例の検索に当たっては、以下の文献を参考にした。

財団法人千葉県史料研究財団編 1996 『千葉県の歴史 資料編 古代 出土文字資料集成』 千葉県

2 渡邊高広 1992 『千葉市宇津志野窯確認調査報告書』 千葉県教育委員会

谷 旬ほか 1993 『研究紀要 14』 財団法人千葉県文化財センター



第17図 黒書土器集成

第1表 黒書土器一覧表

No.	遺物番号	押印No.	遺物No.	器種	記録内容	部位	No.	遺物番号	押印No.	遺物No.	器種	記録内容	部位
1	003	6	1	土師器環	山	底部外面	12	005	11	11	土師器環	午	底部外面正位
2	003	6	2	土師器環	□	底部外面	13	005	11	12	土師器環	□	底部外面
3	003	6	3	土師器環	益	底部外面	14	005	11	13	土師器環	凸o	底部外面
4	003	7	8	土師器環	㊦o	底部外面	15	051	11	14	土師器環	骨	底部外面
5	004	9	13	土師器環	□	底部外面	16	005	11	15	土師器環	□	底部外面
6	004	9	14	土師器環	□	底部外面	17	005	11	16	土師器環	□	底部内面
7	005	11	8	土師器環	毛	底部外面正位	18	005	11	17	土師器環	□	底部内面
8	005	11	9	土師器環	十	底部内面	19	005	11	18	土師器環	□	底部外面
底部外面正位						20	005	12	19	土師器環	午	底部内面	
10	005	11	10	土師器環	午	底部外面正位	21	011	14	1	土師器環	□o丸女	底部外面横位
底部外面													

第2表 遺物観察表

[001号跡] (第4図 図版7)

番号	器種	法量 cm	遺存度	色調	胎土・焼成	調整	備考
1	土師器 卍	口径 14.7 底径 7.9 器高 4.5	口縁 1/3 底部 1/2	内面 褐色 外表面 黒褐色	赤色粒多、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：回転 糸切り後回転ヘラケズリ 底部：回 転ヘラケズリ	P.上面・床直 ～+10cm
2	土師器 卍	口径 12.1 底径 6.5 器高 3.7	ほぼ完形	内面 焦茶色 外表面 褐色	黄砂粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 後周縁部手持ちヘラケズリ	P.中 内面に油燻付着
3	土師器 高台付卍	口径 — 底径 7.0 残存高 1.8	底部 1/3	内面 褐色 外表面 褐色	赤色粒、白色粒、 良	内面：ナテ 高台部：貼付ナテ	+14cm
4	須恵器 卍	口径 14.4 底径 7.0 器高 4.2	口縁 2/5 底部 1/2	内面 灰褐色 外表面 灰褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 後手持ちヘラケズリ (一定方向)	+3cm
5	土師器 甕	口径 17.4 底径 — 残存高 6.7	口縁 1/4	内面 褐色 外表面 褐色	雲母粒、赤色粒、 良	口縁部：横ナテ 胴部：縦位ヘラケ ズリ 内面：ナテ	+10cm
6	土師器 甕	口径 — 底径 7.8 残存高 4.3	底部 1/3	内面 褐色 外表面 褐色	雲母粒・赤色粒、 良	胴部下半：縦位ヘラケズリ 内面： ナテ	+3cm
7	土師器 甕	口径 13.6 底径 — 残存高 14.0	口縁～胴部 上半 1/2	内面 淡褐色 外表面 淡褐色	赤色粒、良	口縁部：横ナテ 胴部：上半縦位ヘ ラケズリ 下半横位ヘラケズリ 内面：ヘラナテ	+3cm～8cm
8	土師器 甕	口径 13.4 底径 — 残存高 8.4	口縁～胴部 上半 1/3	内面 暗褐色 外表面 暗褐色	雲母粒、白色粒、 良	口縁部：横ナテ 胴部：上半縦位ヘ ラケズリ 下半横位ヘラケズリ 内面：ヘラナテ	床直(P.上面)・ +10cm
9	須恵器 長頸壺	口径 — 底径 9.0 残存高 10.2	胴部下半 1/3 底部 1/1	内面 灰色 外表面 灰色	白色粒、良	底部：回転糸切り 胴部：回転ヘラ ケズリ 高台部：ナテ	床直 胴部に自然釉
10	硜石	長さ7.6cm、重量45.2g					+10cm

[002号跡] (第5図 図版7)

番号	器種	法量 cm	遺存度	色調	胎土・焼成	調整	備考
1	土師器 卍	口径 13.3 底径 6.3 器高 5.7	口縁 1/3 底部 1/1	内面 橙色 外表面 明褐色	砂粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 後手持ちヘラケズリ (一定方向)	カマド
2	土師器 卍	口径 15.7 底径 7.1 器高 5.7	口縁 1/3 底部 1/1	内面 黒褐色 外表面 黄土色 ～黒褐色	砂粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 後手持ちヘラケズリ	カマド
3	土師器 卍	口径 13.2 底径 6.9 器高 4.2	口縁 4/5 底部 1/1	内面 暗褐色 外表面 黒褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 後周縁部手持ちヘラケズリ	カマド
4	土師器 甕	口径 19.0 底径 — 残存高 20.7	口縁～胴部 上半 1/1	内面 褐色 外表面 褐色	雲母粒、白色粒、 良	口縁部：横ナテ 胴部：上半縦位ヘ ラケズリ 下半横位ヘラケズリ 内面：ナテ	床直
5	土師器 甕	口径 (24.0) 底径 — 残存高 4.8	口縁 1/5	内面 茶褐色 外表面 褐色	白色粒、砂粒、良	口縁部：横ナテ 胴部：縦位ヘラケ ズリ 内面：ヘラナテ	カマド
6	土師器 甕	口径 (14.4) 底径 — 残存高 5.5	口縁 1/4	内面 暗褐色 外表面 赤褐色	白色粒、二次焼成	口縁部：横ナテ 胴部：縦位ヘラケ ズリ 内面：ヘラナテ	カマド
7	土師器 甕	口径 — 底径 —	胴部破片	内面 明褐色 外表面 明褐色	白色粒、砂粒、良	胴部：ナテ 内面：ヘラナテ 外面 に輪状痕 つまみほねじ込み	カマド
8	須恵器 甕	口径 — 底部 —	頸部破片	内面 褐色 外表面 黒褐色	白色粒、良	胴部：縦位平行タタキ 内面：ナテ	カマド

[003号跡] (第6・7図 図版7・8)

番号	器種	法量 cm	遺存度	色調	胎土・焼成	調整	備考	
1	土師器 坏	口径 (12.3) 底径 6.5 器高 5.0	口径 1/5 底部 1/1	内面 明褐色 外面 明褐色	雲母粒、良	内外面：ロコロナテ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ (全周)	床直 底部黒書「山」	
2	土師器 坏	口径 (12.3) 底径 6.7 器高 4.1	口径 1/2 底部 1/2	内面 橙褐色 外面 橙褐色	白色粒、赤色粒、良	内外面：ロコロナテ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後期縁部回転ヘラケズリ	+15cm・貼床内 底部黒書「口」	
3	土師器 坏	口径 — 底径 7.4 残存高 1.7	底部 2/3	内面 明褐色 外面 黒褐色	雲母粒、白色針状物、良	内面：ロコロナテ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後期縁部回転ヘラケズリ	+5cm 底部黒書「益」	
4	土師器 坏	口径 14.9 底径 7.2 器高 4.9	口径 2/5 底部 1/1	内面 黒色 外面 褐色	雲母粒、白色針状物、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後期縁部回転ヘラケズリ	床直 内面黒色処理 底部黒割「mm」	
5	土師器 坏	口径 14.5 底径 8.0 器高 4.7	口径 2/5 底部 1/1	内面 黒色 外面 褐色	雲母粒、白色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ (一定方向)	+20cm 内面黒色処理	
6	土師器 坏	口径 11.4 底径 5.6 器高 4.0	口径 1/3 底部 1/2	内面 明褐色 外面 明褐色	白色粒、赤色粒、良	内外面：ロコロナテ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後期縁部回転ヘラケズリ	+35cm	
7	土師器 坏	口径 (12.3) 底径 5.5 器高 3.8	口径 1/8 底部 1/2	内面 明褐色 外面 明褐色	白色粒、赤色粒、良	内外面：ロコロナテ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後期縁部回転ヘラケズリ	+25cm・40cm	
8	土師器 坏	口径 — 底径 —	底部破片 —	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、赤色粒、良	内面：ナテ 底部：回転糸切り後期縁部回転ヘラケズリ	覆土中 底部黒書「㊦」	
9	土師器 坏	口径 11.4 底径 7.0 器高 3.9	口径 3/4 底部 1/2	内面 黒色 外面 褐色	白色粒、赤色粒、良	内面：粗いヘラミガキ 口径：横ナテ 体部：ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ (一定方向)	カマド 口径内面油埋付書	
10	土師器 高台付坏	口径 12.8 底径 6.6 器高 4.8	口径 4/5 底部 1/1	内面 明褐色 外面 明褐色	白色粒、赤色粒、白色針状物、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：手持ちヘラケズリ 高台部：ナテ	+10cm・カマド一拵	
11	須恵器 坏	口径 (13.2) 底径 7.0 器高 4.4	口径 1/5 底部 1/2	内面 暗褐色 外面 茶褐色	雲母粒、白色粒、良	内外面：ロコロナテ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	カマド袖外・床直	
12	土師器 甕	口径 (13.2) — 残存高 3.8	口径 1/4	内面 茶褐色 外面 茶褐色	白色粒、良	口径：横ナテ 胴部：縦位ヘラケズリ	貼床内	
13	須恵器 甕	口径 — 底径 —	口径部破片 —	内面 橙色 外面 暗灰色	白色粒、良	口径：横ナテ	+25cm(壁期)	
14	須恵器 甕	口径 — 底径 —	口径一割上 半部破片	内面 灰色 外面 濃灰色	白色粒、良	口径部：横ナテ 胴部：縦位タタキ内面：指頭によるオサエ後ヘラナテつまみはヘラケズリ	15と同一個体 +10cm・25cm	
15	須恵器 甕	口径 — 底径 (14.6) 残存高 14.0	胴部下半一 底部 1/3	内面 灰色 外面 濃灰色	白色粒、良	胴部：下半縦位平行タタキ後横位ヘラケズリ 内面：指頭によるオサエ後ヘラナテ 底部：敷物痕	14と同一個体 +7cm・20cm	
16	須恵器 甕	口径 — 底径 15.5 残存高 14.0	胴部下半一 底部 4/5	内面 灰色 外面 灰色～褐色	白色粒、二次焼成	胴部：下半縦位平行タタキ後横位ヘラケズリ 内面：指頭によるオサエ後ヘラナテ 底部：敷物痕	床直・カマド	
17	須恵器 甕	口径 — 底径 15.2 残存高 11.2	胴部下半一 底部 1/2	内面 灰色 外面 灰色	白色粒、良	胴部：下半縦位平行タタキ後横位ヘラケズリ 内面：指頭によるオサエ後ヘラナテ 底部：敷物痕	床直 底部黒書「×」	
18	須恵器 甕	口径 — 底径 —	胴部破片 —	内面 灰色 外面 灰白色	白色粒、良	胴部：平行タタキ 内面：ヘラナテ同心円文	+5cm	
19	須恵器 甕	口径 — 底径 —	底部破片 —	内面 茶褐色 外面 黒茶色	白色粒、良	内面：ナテ 底部：無調整	カマド 底部黒書	
20	瓦	丸瓦破片。胎土に雲母含む。凸面にヘラ整形、凹面に布を縦じ合わせた置所みられる。						床直・カマド
21	刀子	鉄製。現存長7.1cm、重さ9.5g、刃部と基部の先端欠損。刃先端と基部が折れ曲がっている。						+45cm

[004号跡] (第8・9図 図版9)

番号	器種	法量 cm	造存度	色調	胎土・焼成	調 整	備 考
1	土師器 土師 土師	口径 (16.0) 底径 (7.0) 器高 5.6	口縁 1/5 底部 1/10	内面 焦茶色 外面 橙色	白色粒微量、赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	+15cm
2	土師器 土師 土師	口径 (14.1) 底径 7.0 器高 4.8	口縁 1/5 底部 1/4	内面 焦茶色 外面 暗褐色	白色粒、赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ (全周)	+10cm
3	土師器 土師 土師	口径 - 底径 6.2 残存高 2.3	底部 1/1	内面 明褐色 外面 明褐色	赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ (一定方向)	+14cm
4	土師器 土師 土師	口径 (13.7) 底径 6.4 器高 4.3	口縁 1/8 底部 1/2	内面 明褐色 外面 明褐色	赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	+15cm
5	土師器 土師 土師	口径 (13.4) 底径 6.6 器高 3.6	口縁 1/4 底部 1/2	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、赤色粒、良	内外面：ロクロナデ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ (全周)	カマド
6	土師器 土師 土師	口径 (13.9) 底径 (6.1) 器高 4.7	口縁 1/6 底部 1/5	内面 明褐色 外面 明褐色	赤色粒、良	内外面：ロクロナデ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	+18cm
7	土師器 土師 土師	口径 (12.6) 底径 6.1 器高 4.4	口縁 1/4 底部 1/2	内面 明褐色 外面 明褐色	赤色粒、良	内外面：ロクロナデ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ (全周)	直床・カマド一括
8	土師器 土師 土師	口径 (12.2) 底径 (6.2) 器高 3.6	口縁 1/4 底部 1/4	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、赤色粒、良	内外面：ロクロナデ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ	+10cm・15cm 口縁部にヘラの当たり痕
9	土師器 土師 土師	口径 (12.4) 底径 6.0 器高 3.8	口縁 1/4 底部 4/5	内面 黒褐色 外面 黒褐色	赤色粒、良	内外面：ロクロナデ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ (一定方向)	+20cm
10	土師器 土師 土師	口径 (13.0) 底径 7.2 器高 3.6	口縁 1/5 底部 1/5	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、赤色粒、良	内外面：ロクロナデ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ	+5cm
11	土師器 土師 土師	口径 - 底径 6.4 残存高 1.8	底部 1/2	内面 橙色 外面 明褐色	良	内外面：ロクロナデ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ (全周)	カマド
12	土師器 土師 土師	口径 - 底径 6.8 残存高 1.1	底部 4/5	内面 褐色 外面 暗褐色	白色粒、赤色粒、良	内面：ロクロナデ 体部下位：ヘラケズリ 底部：回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ	+10cm
13	土師器 土師 土師	口径 - 底径 -	口縁部破片	内面 暗褐色 外面 暗褐色	良	内外面：ロクロナデ	覆土中 体部遺書「□」
14	土師器 土師 土師	口径 - 底径 -	口縁部破片	内面 明褐色 外面 明褐色	良	内外面：ロクロナデ	覆土中 体部遺書「□」
15	土師器 土師 土師	口径 13.1 底径 6.2 器高 3.8	口縁 1/2 底部 1/2	内面 明褐色 外面 明褐色	赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ (全周)	+15cm
16	須恵器 土師 土師	口径 (13.0) 底径 (10.0) 器高 4.1	口縁 1/5 底部 1/5	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、砂粒、良	内外面：ロクロナデ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ	+5cm~20cm
17	土師器 土師 土師	口径 (21.4) 底径 - 残存高 19.1	口縁-胴部 1/4	内面 褐色 外面 茶褐色	白色粒、赤色粒、良	口縁：横ナデ 胴部：上半縦位ヘラケズリ 下半横位ヘラケズリ 内面：ナデ	18と同一個体 +5cm~20cm・ カマド
18	土師器 土師 土師	口径 - 底径 (10.0) 残存高 19.2	胴部下半 1/4 底部 1/6	内面 褐色 外面 茶褐色	白色粒、赤色粒、良	胴部：下半横位ヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ	17と同一個体 カマド
19	土師器 土師 土師	口径 12.5 底径 7.0 器高 13.6	口縁 4/5 底部 3/4	内面 暗褐色 外面 暗褐色	白色粒、良	口縁：横ナデ 胴部：上半縦位ヘラケズリ 下半横位ヘラケズリ 内面：ナデ 底部：手持ちヘラケズリ	+5cm~25cm
20	土師器 土師 土師	口径 - 底径 -	口縁部破片	内面 暗褐色 外面 焦茶色	白色粒、赤色粒、良	口縁：横ナデ 胴部：上半縦位ヘラケズリ	+15cm
21	土師器 土師 土師	口径 - 底径 (9.1) 残存高 2.5	底部 1/1	内面 赤褐色 外面 赤褐色	白色粒、赤色粒、二次焼成	胴部：下半横位ヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ (一定方向)	カマド
22	須恵器 土師 土師	口径 20.4 底径 - 残存高 11.7	口縁 1/2 胴部上半 1/2	内面 暗褐色 外面 明褐色	白色粒、赤色粒、やや不良	口縁：横ナデ 胴部：上半縦位平行タタキ 内面：ナデ	+15cm前後

23	須恵器 甕	口径 底径 残存高	- 8.9 1.5	底部 1/2	内面 暗褐色 外面 暗褐色	白色粒、砂粒、や や不具	胴部：下平縁位手持ちヘラケズリ 底部：周縁ヘラケズリ	カマド
24	須恵器 甕	口径 底径	- -	胴部破片	内面 灰色 外面 灰色	白色粒、赤色粒、 良	胴部：平行タタキ 内面：ヘラナデ	+5cm
25	須恵器 甕	口径 底径	- -	胴部破片	内面 灰色 外面 淡灰色	白色粒、赤色粒、 良	胴部：平行タタキ 内面：ヘラナデ	床直
26	須恵器 甕	口径 底径 残存高	- - -	胴部破片	内面 灰色 外面 灰褐色	白色粒、赤色粒、 良	胴部：平行タタキ 内面：ヘラナデ	+5cm
27	刀子	鉄製、完存。	長さ15.7cm、	重さ15.8g、	刃部の先端が折れ曲がっている。			床直
28	鉄製品	現存長3.8cm、	重さ1.7g、	刀子の茎か。				+15cm
29	鉄釘	完存。	長さ8.0cm、	重さ18.5g、	断面四角形。頭部は鍛えて広げてから折り曲がっている。			+20cm
30	磁石	凝灰岩製。一端を欠く。	表面は磨ぎ減りしている。	側面に全切り底が認められる。	重さ80.0g。			床直

[005号跡] (第11~13図 図版10・11)

番号	器種	法量	cm	造存度	色調	胎土・焼成	調	備考
1	土師器 鉢	口径 底径 器高	22.3 9.6 7.5	口縁 2/5 底部 1/1	内面 黒茶色 外面 暗褐色	白色粒、赤色粒、 良	内面：ヘラミガキ 体部下位：回転 ヘラケズリ 底部：回転ヘラ切り後 回転ヘラケズリ(全周)	+10cm~40cm
2	土師器 鉢	口径 底径 残存高	- 8.6 2.2	底部 1/1	内面 茶褐色 外面 暗褐色	白色粒、赤色粒、 良	内面：ヘラミガキ 体部下位：手持ち ヘラケズリ 底部：手持ちヘラケ ズリ	+10cm・50cm
3	土師器 杯	口径 底径 器高	(14.7) 7.6 4.7	口縁 1/5 底部 1/4	内面 黒色 外面 褐色	雲母粒、白色粒、 赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：手持ち ヘラケズリ 底部：手持ちヘラケ ズリ(一定方向)	+20cm 内面黒色処理
4	土師器 杯	口径 底径 器高	12.8 5.6 4.5	口縁 3/4 底部 4/5	内面 褐色 外面 暗褐色	雲母粒、白色粒、 白色針状物、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラ ケズリ	+20cm~35cm 内面・体部に煤 付着
5	土師器 杯	口径 底径 器高	13.3 7.1 4.8	ほぼ完形	内面 明褐色 外面 明褐色	白色粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 後手持ちヘラケズリ(一定方向)	+40cm(壁際)
6	土師器 杯	口径 底径 器高	12.0 7.1 4.1	完形	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラ ケズリ(一定方向)	+20cm
7	土師器 杯	口径 底径 器高	13.2 6.6 3.7	口縁 1/2 底部 2/5	内面 黒褐色 外面 暗褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：回 転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後 周縁部回転ヘラケズリ	+20cm 内底に朱墨溜
8	土師器 杯	口径 底径 器高	12.8 7.1 4.2	完形	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラ ケズリ	カマド 内底・体部に墨 書「色」
9	土師器 杯	口径 底径 器高	12.7 7.1 4.1	口縁 1/2 底部 1/1	内面 褐色 外面 明褐色	雲母粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：回 転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後 回転ヘラケズリ	+10cm~25cm 体部に墨書「十」
10	土師器 杯	口径 底径 器高	12.0 7.5 3.9	口縁 3/5 底部 5/6	内面 淡褐色 外面 淡褐色	白色粒、砂粒、良	内外面：ロクロナテ 底部：手持ち ヘラケズリ	+25cm 体部・底部に墨 書「午」
11	土師器 杯	口径 底径 器高	(12.6) 6.0 4.3	口縁 1/6 底部 1/1	内面 明褐色 外面 明褐色	雲母粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 後手持ちヘラケズリ	+30cm・40cm 体部に墨書「午」
12	土師器 杯	口径 底径 器高	13.2 7.1 3.5	口縁 1/2 底部 1/1	内面 茶褐色 外面 淡褐色	雲母粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：回 転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後 周縁部回転ヘラケズリ	+5cm~15cm 体部下位~底部 に墨書「□」
13	土師器 杯	口径 底径 器高	(13.2) 7.1 4.1	口縁 1/4 底部 2/5	内面 淡褐色 外面 淡褐色	赤色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：回 転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後 周縁部回転ヘラケズリ	+30cm 体部に墨書「丑 a」
14	土師器 杯	口径 底径 残存高	- 6.6 1.0	底部 2/3	内面 明褐色 外面 明褐色	白色粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り 後周縁部手持ちヘラケズリ	+5cm・20cm 体部に墨書「曾」
15	土師器 杯	口径 底径 残存高	- - 2.1	底部破片	内面 黒色 外面 褐色	赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：手持ち ヘラケズリ 底部：手持ちヘラケ ズリ	腹土中 底部に墨書「□」 内面黒色処理

16	土師器 罎	口径 底径 残存高	— — 2.0	底部破片	内面 外面	明褐色 明褐色	白色粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：回 転ヘラケズリ 底部：回転糸切り後 周縁部回転ヘラケズリ	+40cm 内底に黒書「□」
17	土師器 罎	口径 底径	— —	底部破片	内面 外面	黒茶色 黒茶色	白色針状物、良	内面：ロクロナテ 体部下位：手持 ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケ ズリ	腹土中 内底に黒書「□」
18	土師器 罎	口径 底径	— —	口縁部破片	内面 外面	褐色 褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ	腹土中 体部に黒書「□」
19	土師器 高台付皿	口径 底部 器高	13.2 6.7 2.7	口縁 5/6 底部 1/1	内面 外面	黒褐色 —褐色 黒褐色	雲母粒、白色粒、 良	内面：ヘラミガキ 体部：ロクロナ テ 高台部：ナテ	+15cm(壁際) 底部に黒書「午」
20	土師器 高台付皿	口径 底径 器高 残存高	— — 6.3 1.6	底部 1/1	内面 外面	褐色 褐色	雲母粒、白色粒、 赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 底部：回転糸切 り 高台部：ナテ	+20cm
21	須恵器 罎	口径 底径 器高	(13.4) (6.8) 4.2	口縁 1/4 底部 1/4	内面 外面	暗灰色 暗灰色	白色粒、赤色粒、 やや良	内外面：ロクロナテ 体部下位：回 転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズ リ	+10cm
22	須恵器 罎	口径 底径 器高	13.7 6.6 4.2	口縁 4/5 底部 1/1	内面 外面	灰褐色 灰褐色	白色粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転ヘラ切 り後手持ちヘラケズリ (一定方向)	+20cm-40cm
23	須恵器 罎	口径 底径 器高	13.7 (7.1) 4.0	口縁 1/3 底部 1/4	内面 外面	灰褐色 灰褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転ヘラ切 り後手持ちヘラケズリ (一定方向)	+10cm・カマド 一括
24	須恵器 罎	口径 底径 器高	13.3 6.8 3.5	口縁 9/10 底部 1/1	内面 外面	灰褐色 灰褐色	白色粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手 持ちヘラケズリ 底部：回転ヘラ切 り後手持ちヘラケズリ (一定方向)	+20cm
25	須恵器 罎	口径 底径 器高	13.8 — —	口縁一体部 1/4	内面 外面	暗灰色 暗灰色	白色粒、赤色粒、 良	内外面：ロクロナテ 体部下位：ヘ ラケズリ	+20cm
26	土師器 甕	口径 底径 残存高	19.7 — 24.8	口縁一胴部 2/3	内面 外面	暗褐色 暗褐色	雲母粒、白色粒、 赤色粒、良	口縁：横ナテ 胴部：上半ヘラナテ 下半ヘラミガキ 内面：ヘラナテ	カマドA
27	土師器 甕	口径 底径 残存高	19.6 — 24.2	口縁一胴部 2/5	内面 外面	淡褐色 淡褐色	雲母粒、白色粒、 砂判、やや不良	口縁：横ナテ 胴部：上半ヘラナテ 下半ヘラミガキ 内面：ヘラナテ	カマドB
28	土師器 甕	口径 底径 残存高	11.6 — 5.5	口縁一胴部 上半 1/2	内面 外面	褐色 褐色	白色粒、赤色粒、 良	口縁：横ナテ 胴部：上半横位ヘラ ケズリ 内面：ナテ	床直・+30cm
29	土師器 罎	口径 底径 器高 残存高	— — 6.4 1.4	底部 1/1	内面 外面	褐色 褐色 —褐色	雲母粒、白色粒、 赤色粒、良	体部：下半横位手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ (一定方向)	+20cm
30	須恵器 甕	口径 底径	— —	口縁部破片	内面 外面	暗灰色 暗灰色	白色粒、赤色粒、 良	口縁：横ナテ 胴部：上半縦位平行 タタキ 内面：ナテ	床直・貼床
31	須恵器 甕	口径 底径 残存高	24.2 — 10.0	口縁一胴部 上半 1/4	内面 外面	暗灰色 暗灰色	雲母粒微量、白色 粒、赤色粒、良	口縁：横ナテ 胴部：縦位平行タタ キ 内面：指頭正腕 ヘラナテ	+20cm
32	須恵器 甕	口径 底径 残存高	(26.0) — 11.8	口縁一胴部 上半 1/2	内面 外面	赤褐色 赤褐色	白色粒、赤色粒、 やや良	口縁：横ナテ 胴部：縦位平行タタ キ 内面：指頭正腕 ヘラナテ	カマドA・+30 cm-40cm
33	須恵器 甕	口径 底径	— —	口縁部破片	内面 外面	灰白色 灰白色	雲母粒多量、白色 粒、良	口縁：横ナテ 胴部：上半縦位平行 タタキ 内面：ナテ	カマドA
34	須恵器 甕	口径 底径 残存高	— — 14.8 4.2	底部 3/4	内面 外面	赤褐色 赤褐色	雲母粒、赤色粒、 二次焼成	胴部：下半横位ヘラケズリ 底部： 敷物痕 内面：ヘラナテ	カマドB 底部に黒書
35	須恵器 甕	口径 底径	— —	底部破片 (底面五孔)	内面 外面	褐色 褐色	白色粒、赤色粒、 良	内面：ナテ	+30cm・40cm
36	須恵器 甕	口径 底径	— —	底部破片 (底面五孔)	内面 外面	灰褐色 灰褐色	白色粒、赤色粒、 良	内面：ナテ	カマドB・+30 cm 底部に黒 書
37	瓦	平瓦破片か、粘土に雲母含む、凸面ヘラ整形、凹面布目。							カマド右袖・+ 35cm
38	鋳造具	青銅製。鋳具の先端の弓状部分。両端には刺金を入れる小孔を穿つ。重さ5.3g。							+30cm(壁際)
39	刀子	鉄製。重さ17.1g。刃部先端欠損。刃部の中央あたりで35°に折り曲げられている。							+40cm
40	鉄鏝	楯板式。両端部欠損。重さ13.8g。							+20cm
41	砥石	凝灰岩製。片面がかなり研ぎ減りしている。重さ101.8g。							+20cm

[011号跡] (第14図 図版11)

番号	器種	法量 cm	遺存度	色調	胎土・焼成	調整	備考
1	土師器 坏	口径 (15.2) 底径 8.1 器高 5.0	口縁 1/8 底部 1/2	内面 黒色 外面 褐色～黒褐色	雲母粒、白色粒、赤色粒、良	内面：ヘラミガキ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ (全周)	床直 体部黒書「部丸文」内面黒色処理
2	土師器 坏	口径 12.6 底径 6.4 器高 4.0	完形	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、赤色粒、殿砂粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ (一定方向)	床直 口縁部内面に灯芯の残跡
3	土師器 坏	口径 12.1 底径 6.4 器高 3.3	ほぼ完形	内面 褐色 外面 褐色	雲母粒、赤色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ (全周)	床直 口縁部内面に油繕付着
4	須恵器 坏	口径 (14.6) 底径 8.6 器高 4.4	口縁 1/7 底部 1/2	内面 赤褐色 外面 赤褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ	床直
5	土師器 甕	口径 — 底径 9.0 残存高 10.9	胴部下半— 底部 1/3	内面 暗褐色 外面 暗褐色	白色粒、二次焼成	内面：ヘラナテ 胴部：縦位ヘラケズリ後横位ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	カマド

[土坑] (第15図 図版12)

番号	器種	法量 cm	遺存度	色調	胎土・焼成	調整	備考
6-1	鉄製品	円筒形を呈し、頸部に方形の孔が穿たれている。					+25cm
6-2	鉄釘	長さ4.8cm、断面四角形を呈する。					+25cm
7-1	土師器 坏	口径 — 底径 —	口縁部破片	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手持ちヘラケズリ	覆土中
7-2	土師器 坏	口径 — 底径 —	口縁部破片	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手持ちヘラケズリ	覆土中
7-3	土師器 坏	口径 — 底径 —	口縁部破片	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手持ちヘラケズリ	覆土中
8-1	土師器 坏	口径 (13.5) 底径 5.9 器高 4.5	口縁 1/6 底部 4/5	内面 褐色 外面 明褐色	白色粒、赤色粒、良	内外面：ロクロナテ 体部下位：手持ちヘラケズリ 底部：ヘラケズリ (一定方向)	+58cm
8-2	土師器 甕	口径 — 底径 —	胴部破片	内面 褐色 外面 褐色	白色粒、赤色粒、良	胴部：縦位ヘラケズリ後横位ヘラケズリ	+5cm
8-3	土師器 甕	口径 6.5 底径 3.8 残存高 3.8	底部 1/2	内面 暗褐色 外面 暗褐色	白色粒、二次焼成	胴部：下半 横位ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	+30cm

写 真 图 版



遺跡周辺航空写真



調査前近景 (南西より)



001号跡



001号遺物出土状況;左
002号跡カマド内遺物
出土状況;右



002号跡



003・004号跡



003号跡遺物出土状況;左
003号跡カマド;右



004号跡



004号跡カマド



005号跡



005号跡遺物出土状況

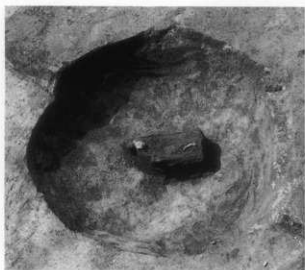


005跡カマドA;左
カマドB;右



011号跡遺物出土状況





006号跡



007号跡



008号跡



009号跡



012号跡



013号跡

014号跡



001-1



001-2



001-4



001-5



001-8



001-7



001-9



001-10



001-6



002-1



002-2



002-3



002-4



002-5



002-6



002-7



003-1



003-2



003-5



003-4



003-6



003-9



003-10



003-11



003-12



003-18



003-14



003-16



003-17



003-15



003-21



003-20



003-19





004-1



004-2



004-4



004-5



004-6



004-7



004-8



004-9



004-10



004-15



004-16



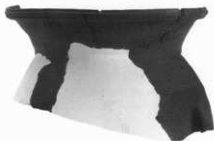
004-25



004-17



004-19



004-22



004-18



004-27



004-28



004-30



004-29



005-1



005-3



005-4



005-5



005-6



005-7



005-8



005-10



005-19



005-11



005-20



005-9



005-11



005-12



005-13



005-21



005-22



005-23



005-24



005-26



005-27



005-34



005-35



005-28



005-31



005-36



005-32



005-37



005-38



005-39



005-40



005-41



011-1



011-3



011-4



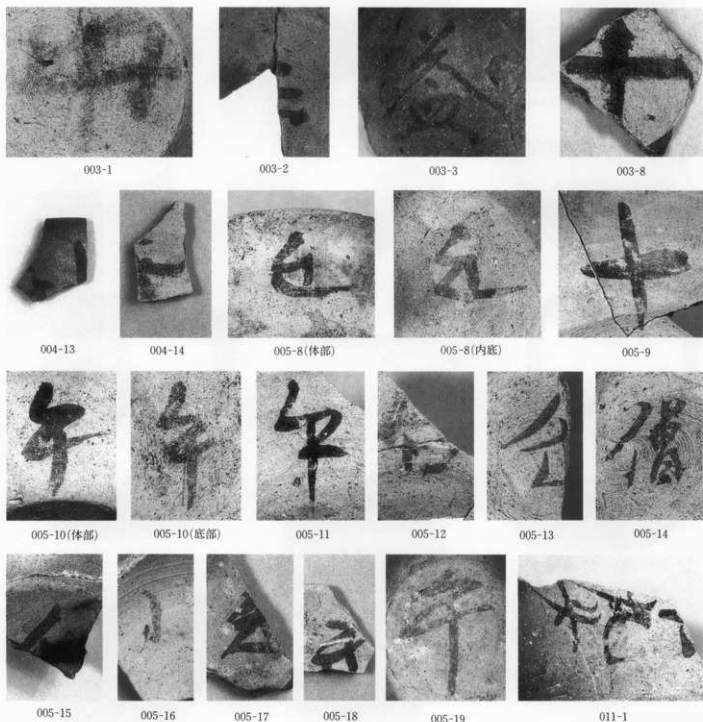
011-2



011-5



1. 土坑・グリッド等出土遺物



2. 墨書土器集成(赤外線)

報告書抄録

ふりがな	さくらしもかつたたいはたけいせき							
書名	佐倉市下勝田台畑遺跡							
副書名	印旛沼流域下水道埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第312集							
編著者名	榊原 弘二							
調査機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL043-422-8811							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃	〃		㎡	
下勝田台畑	千葉県佐倉市 下勝田字台畑 319-1番地ほか	12212	038	35° 41' 40"	140° 16' 04"	19967008~ 19967031 19969002~ 19969010 19969024~ 19969030	665㎡	下水道管渠 築造工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下勝田台畑	集落	縄文 平安	竪穴住居跡 土坑	6軒 4基	土器、石器 土師器、須恵器 鉄製品(釘・刀子) 青銅製品(銚帯具) 磁石	9世紀代の集落を検出		

千葉県文化財センター調査報告第312集

佐倉市下勝田台畑遺跡

— 印旛沼流域下水道埋蔵文化財調査報告書 —

平成9年3月31日発行

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	千葉県印旛沼下水道事務所 千葉県美浜区磯辺8-24-1
	財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社 エリート印刷 千葉県中央区市場町6-8
